

# 温存される安倍政権を支えた「鉄の三角形」 野党合同新党の闘いが始まる

安倍晋三首相の退陣表明から1週間、世論の関心はきたる自民党総裁選で次期首相の座を射止めるのは誰か、そして解散総選挙のゆくえがどうなるかに移っている。

およそ8年間にわたる安倍政権の支配の下で、投票率は劇的に低下し、議会制民主主義は破壊され、政治不信だけが世論を覆う結果となった。ただ、今必要なことは、安倍首相の退陣により安倍政権の「システム」が終わったわけではないことをしっかりと認識することだ。安倍首相が退陣しても、「システム」を壊さない限り安倍政権の支配は終わらないのだ。

「一強多弱」といわれた、与党に対する野党の圧倒的劣勢だけが安倍政権の長期支配を許したわけ



菅義偉氏が苦杯を嘗めた2018年沖縄県知事選。当選に沸く玉城デニー氏ら。撮影 初沢亜利

はない。政権維持だけが目的化した後半期は、二階俊博幹事長による党内支配、菅義偉官房長官による官僚支配、麻生太郎副総理による財務省支配という「鉄の三角形」の均衡のうえで成り立っていた。

2018年9月の自民党総裁選における安倍3選は、この鉄の三角形が対抗馬である石破茂氏の封じ込めで結束したことで果たされた。そしてこの時から「ポスト安倍」をめぐるこの3者の攻防が始まっていたのである。

天皇の代替わりがあった19年初旬には菅氏が次期首相候補として浮かび上がってきた。菅氏は令和ブームに乗り、初の外交デビューを果たすなど、次期首相に向けた基盤を固めようとしていた。

それに立ちふさがったのが麻生副総理である。「世襲」「血統」にこだわる麻生氏は菅氏の首相就任を断固認めようとはしなかった。19年末に、菅官房長官の側近である菅原一秀氏、河井克行氏のスキヤンダルが暴露され、両氏は大臣辞任に追い込まれた。この暴露は、20年に入り黒川弘務検事長(当時)の検事総長就任をめぐるスキヤン

ダル暴露にまで及び、菅官房長官は権力を失い、新型コロナ対策からも排除されることになった。このように「鉄の三角形」は麻生、菅の対立の激化により崩壊したかのように思われていたのだ。

## 菅官房長官は いかにして復活したか

ところが、今年半ばに至り、菅官房長官は復権することになる。7月半ば、新型コロナウイルス感染者が増しているにもかかわらず「Go To キャンペーン」は東京を除外して予定通り開始された。予定通りの開始を断固主張したのは菅氏であり、彼の復権は三角形を構成する二階幹事長の後押しによってである。8月に入ると二階氏は菅氏を「有力な首相候補の1人」と公言、ポスト安倍に向けた権力移行の下準備を画策していたのだ。

8月29日、菅官房長官は二階幹事長と会談し、総裁選に出馬する決意を明らかにした。するとただちに「麻生派幹部が菅を支持するよう麻生に進言」竹下派にも菅支持の動き、石破周辺が石破に出馬見送りを進言」というニュースが

報じられた。総裁有力候補だった岸田文雄政調会長は、あわてて頼みの麻生副首相に面会したものの、「岸田を支持するかどうかは」首相の意向がはっきりしないから決められない」と袖にされた。首相の辞任表明からわずか2日で菅新総裁誕生はほぼ確定した。9月半ばに行なわれる予定の自民党総裁選は無投票あるいは無風になることが確実になった。これはつまり、安倍首相抜ききの「鉄の三角形」が温存されるということである。かくして、安倍政権の支配はこれからも続くのである。

この安倍政権の支配システムは、自民党総裁選では崩れることはない。崩すことができるのは、解散総選挙で野党が勝利すること、それしかない。

折しも、9月半ばには野党合同新党が結成される。安倍首相の退陣と入れ替わるように、刷新された野党共闘が国民の前に姿をあらわすのだ。そして、菅官房長官が決して勝てなかったのが「オール沖縄」であることをここで想起すべきであろう。新型コロナ禍のもとでの経済危機が目前に迫るなか、安倍政権の古いシステムを打ち倒し、新しいシステムを構築するための闘いの火ぶたが切られるのだ。

木下ちがや・政治学者